掲載日:2014年08月07日，面名:２社，記事ID:KIJ20140807_M003000120AE09001
(C)新潟日報社

考える役割 私たちにも

風化と闘う

ヒロシマ 見つめる県人たち

〈上〉

高校生

被爆者と対話 悲惨さ痛感

平和とは 新潟から問う

広島に原爆が落とされてから、6日で69年がたった。存命の被爆者はことし、初めて20万人を下回った。「あの日」を語れる人々は減り続けている。一方で、核兵器の恐ろしさ、平和の大切さを知ろう、伝えようとする県人がいる。戦争の悲惨さを少しでも実感したいと願う高校生。親世代の苦しみを知ってほしいと活動する被爆2世。そして、高齢を押してつらい記憶を伝え続ける被爆者。ヒロシマに向き合う県人の姿を見つめた。

×　×

原爆投下直後に救護所となった広島市立袋町小学校。6日、敬和学園高校（新潟市北区）の3年生が小学校を訪れた。敷地内には旧校舎が平和資料館として保存されている。わが子を捜す親や、生徒の安否を確かめる教員らの伝言が壁一面に書かれていた。担当者の説明を聞きながら、小林凌大さん(17)は息をのんだ。

敬和学園高は27年前から平和教育の一環として広島を訪問、被爆者の話を聞くなどしている。ことしは4日から4日間、広島に滞在する日程で11人が参加。小林さんは「原爆のことはよく知らないので」と軽い気持ちで参加したという。

広島を訪れる前にはさまざまな資料を読み、被爆の実態を理解していたつもりだった。訪問後は被爆者から生の声を聞き、その迫力に圧倒されたが、あまりの悲惨さに「自分の経験では計り知れない」と思った。

ただ、広島に滞在するうちに新たな考えが芽生えた。広島では多くの人が原爆を語り継ぎ、惨禍の記憶を伝える施設も多い。原爆について伝え、考えることを「みんなが大切に思っている」。次に誰かと広島を訪れることがあったら「できる限り広島のことを説明したい」と思うようになった。

69年前、確かにこの地に原爆が投下されたんだと肌で感じた。「もともと戦争は駄目だと思っていたけど、親の受け売りでしかなかった」と思った。政府が進める集団的自衛権の行使容認に向けた動きが頭をよぎった。自分も戦争に行かされるのではという不安もある。今なら自分の言葉で「戦争はやっぱり駄目だ」と言える。

平田悠さん(17)は福島県会津若松市出身。東日本大震災後、東京電力福島第1原発事故の影響を心配して本県に自主避難した。

被爆者が「原爆のあまりの悲惨さに、怒りよりも絶望を感じた。家族を失い、一時は生きる気力を奪われた」と話していたのが心に残った。広島で被爆者が平和を願う姿を見て「絶望したから人の痛みに敏感。だから平和を願うんだ」と感じた。被爆者の願いが少し分かったような気がした。

猪俣光さん(17)は6日朝、平和記念式典の会場となった平和記念公園を訪れた。公園の一角にある施設で、式典を中継するテレビを見つめた。

テレビ画面には多くの参列者が映し出され、公園内にはさらに多くの人の姿があった。原爆死没者名簿には約28万人の名が刻まれていると聞いた。式典がとても重い意味を持つことを、あらためて実感した。

証言できる被爆者は減ってきていると聞いた。「被爆の話は、聞いて終わりにできることじゃない。自分たちも伝えていかないと」。自分も戦争と無関係ではないと思うようになった。

袋町小学校の平和資料館を訪れた敬和学園高の生徒。碑に刻まれた当時の被害状況に目を凝らした＝6日、広島市